

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

今どきのトイレ

健康診断で腫瘍が見つかった知人が、胃の手術をした。ステージ1の最も初期段階での発見で、「胃カメラでなくバリウムでよく分かりましたね!」と言われるほど軽いものだった。こんなケースは宝くじに当たるくらい珍しいのではとおっしゃるが、それでも手術となると大変だ。

退院後、その方からまず「便所を直したい」と連絡が入った。その方の家は、新築時に寝室のある二階のトイレを和式で作っていたのだ。私は、「今どき和便器なんて!」と反対したが、清潔好きの方で、人が座った便座を使うのは嫌だと言って譲らなかった。

確かに便座はおしりとおしりの時間差スキンスリップ状態で、どこまで清潔の信頼ができるのかがわからない。和洋リモデル工法などがあるように、和便器を洋便器に変えることはそれほど大変な工事ではないものの、せっかく直すのであれば、壁クロスも好みの柄や色にしたい。小さな花瓶が飾れる棚板も欲しいと、夢は広がる。

また便器の進化は大変な

もので、自動的にふたが開くのは自宅では必要がないとしても、お掃除性能が最新のものをとか、一体型で手洗いは別がいいなど、自分の気に入った機種に落ち着くまで、機能リストを読みこなすのも努力がいる。

定価は、高いものは三〇万円を超えることから、カタログと首っ引きになるのは当然だ。

家のトイレと違い、駅のトイレや公衆便所などでは、不思議な状況が発生している。身だしなみに時間がかかる女性の場合は、順番待ちをすることが多いのだが、個室が空いているのに並んでいるのだ。見ると、和便器だから空いているのである。私は公衆便所の便座は若干抵抗感があるのでも、和便器が空いているとラッキーと思う方だが、本当はトイレ内の雑菌数は洋便器の方がずっと少ないというデータを見たことがある。それとは別に、ご高齢になると、どうやら和便器でのしやがみ込みが辛いらしい。

和便器にしゃがみ込んだものの立ち上がれず、手が届いた紙巻器に力を入れた

ら、紙巻器が壁から外れて壊れ、ひっくり返ったという笑えない話をされた方がいた。今は手摺がついたトイレもあるが、昔は縦の給水管を立ち上がりの手摺替わりにして壊し、水が噴き出してトイレ中が水びたしになったと、笑い話では済まされないようなトイレにまつわる苦労話は次々と出てくる。最近の新聞に外国人が日本に来て驚くことのひとつが、和式トイレと書いてあった。

「便所の一〇〇%」と、無駄に明るい人のことだとえに使われたりするトイレだが、「便秘でもないのに、お父さんのトイレは無駄に長い」と言っ方がいる。人によっては、唯一家族から一人になれる隠れ家がトイレなのだが、それも洋便器でしっかり座れることができるからのことだ。

もはやトイレは不浄の場所ではないと言われるのは、「きれい!」をかなえるテクノロジーを装着した便器のおかげだと思う。

最も日常生活に関わるトイレを、他の水回りと合わせて、早めにきちっと改修しておく方がよさそうだ。



西田恭子氏プロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。